

学位論文 要旨

川端康成初期作品研究—翻訳文学との関係を中心に

熊本大学大学院社会文化科学研究科 博士後期課程

文化学専攻

日本・東アジア文化学領域

彭柯然

本論文は、作家川端康成（一八九九～一九七二）について、翻訳文学という視点から川端自身による翻訳小説を含む一連の初期作品を検討するものである。川端文学を論じる際に、彼自身による戦後一連の〈日本復帰〉宣言から、その特徴が〈日本的〉もしくは〈伝統的〉であると評価されることが多い。しかし、川端はいわゆる「新感覚派」の旗手として文壇に登場した作家であり、作品におけるモダニズム的な性格は、初期作品のみの特徴ではなく、晩年の「みづうみ」（一九五四）などの作品でも注目されている。また、川端にとっての〈日本〉とは〈西洋〉との対決を止揚したうえで、相対化させたものであろう。つまり、川端文学の特徴は〈日本的〉ないし〈伝統的〉という面にだけ存在するのではなく、その〈西洋的〉な面を看過できないといえるだろう。近年、川端文学におけるモダニズム的な性格を分析する論が増えてきたが、それにもかかわらず、その重要な源流の一つと考えられる翻訳文学からの受容と影響に関する詳細な検討は少ない。

川端初期の日記や評論を辿っていくと、翻訳小説を読んだ感想が散見される。また、若き日の川端は表現主義・未来派などの西洋の新しい文学動向を反映した翻訳劇を相次いで上演した築地小劇場によく通った。そして、早期の評論において、ストリンドベリ、イブセン、ポール・モーラン、ゲーテなどの欧米圏の大物作家の名前が屢々言及される。以上のことから、青年期の川端の外国文学に対する深い関心が窺われる。

このような読書、観劇体験は川端の外国文学に対する態度を反映する一方で、後年の創作に何らかの影響を与えたと考えられる。理論面からみれば、初期に新しい表現で新しい文学の創造を意図した川端の文学観は、翻訳によって紹介された西洋の芸術理論に直接結びつく点が多い。例えば、「新文章論」（一九二三）や「新進作家の新傾向解説」（一九二五）において、川端がベネデット・クロッチェの〈心象即表現即芸術〉という説を引用し、新進作家の表現は〈主観的〉、〈直観的〉、〈感覚的〉であるべきだと説明している。実際の創作面からみれば、「針と硝子と霧」（一九三〇）、「水晶幻想」（一九三一）などの作品はジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」に代表される新心理主義からの影響を受けたと考えられる。

以上、川端の作家形成期において、翻訳文学が重要な役割を果たしていると推定されるため、本論文では、翻訳文学という視点から、川端の初期作品を検討する。本論文は二部構成である。まず、第一部では、川端の翻訳実践について詳しく分析した。川端は作家としての出発期に一連の外国文学作品を翻訳したが、従来の研究史においてあまり重視されていない

かった。確かに、彼自身が手掛けた翻訳の数は芥川龍之介や佐藤春夫などの作家と比べると、極めて少ないため、体系的に論じにくい。しかし、川端にとっての同時期は、西洋文学を中心とした翻訳文学と翻訳文化から少なからぬ影響を受容しながら小説家としての自己形成を行なった時期に相当しており、これらの翻訳や翻案は、初期川端文学の創作手法を検討する上で重要な示唆を提供する作品であると考えられる。

続いて、第二部では、都市翻訳小説との関係を中心に、「浅草紅団」の再読を試みた。川端初期の創作と翻訳文学との関連について、従来の研究では、主に新心理主義やシュルレアリズムに焦点を当てており、作品論も「針と硝子と霧」、「水晶幻想」に集中したために、都市翻訳文学への関心は限られていた。周知の通り、近代都市をいかに表現するかという課題は、新感覚派の作家たちにとって関心の一つであった。日本では、一九二三年の関東大震災後、古い都市が壊れ、近代都市が建設されることで、今までとはまったく異なった都市の表現方法が要請され、発展した。一九二〇年代ごろまでに、欧米において近代都市空間が成立し、それに伴う新しい都市環境を表現するための文学技法が作り出された。そして、近代都市を表現するダダイズム、シュルレアリズムなどの新しい小説手法が日本に紹介された。ちょうどその時期に執筆された「浅草紅団」を検討することで、川端における都市小説の一面を解明することができるだろう。

具体的には、第一部では、現時点で確認できる川端による翻訳や翻案について、第一章「川端康成と一九二二年の翻訳」、第二章「川端康成と唐代小説の翻訳」、第三章「川端康成と翻案小説「星を盗んだ父」」という三章に分けて検討した。

第一部第一章「川端康成と一九二二年の翻訳」では、川端が一九二二年に行ったジョン・ゴールズワージーの「街道」、ロード・ダンセイニの「Oasis of Death」、アントン・チャーホフの「芝居から帰って」の三つの翻訳を研究対象にした。まず、これらの短編小説の原作について調査した。「街道」は一九一九年に刊行されたジョン・ゴールズワージーの短編小説集“Another Sheaf”の巻頭に収録された小品である。“The Oases of Death”は一九一八年にアイルランドの作家ロード・ダンセイニによって書かれた作品で、“Tales of War”という単行本に収録されている。そして、アントン・チャーホフの「芝居から帰って」は英語からの重訳である。ロシア語の原文が発表されたのはチャーホフによる一八八二年のピーターズバーグ新聞の定期刊行物『ジョイ』である。一九一五年に S. Koteliansky & J. M. Murry と Marian Fell がそれぞれロシア語の英語訳を出した。そして、一九二一年に Constance Garnett 訳のもう一種類の“After The Theatre”が翻訳集“The Schoolmistress and Other Stories”に収録されている。三つの英語訳と川端訳を比較してみると、内容上の対応から、川端は S. Koteliansky & J. M. Murry が訳したものを底本にした可能性が高いと推定される。次に、文の構造、語彙の分析の二つの方面から川端訳の特徴を分析した。文の構造について、文長と一文の中に複数の句や節、等位構造などを含む比較的長い文を例に、原文と比較した。その結果、川端訳の特徴は原文に忠実な直訳である一方で、目的言語である日本語としての自然性も追求していることが確認できた。また、語彙について、人称代名詞と文化

関連語彙を取り上げ、川端は起点言語（翻訳対象となった言語）の語彙を持ち込む（異化的翻訳）の代わりに、目的言語の慣用表現を用いていると結論づけた。最後に、翻訳の背景について、以下の四点を指摘した。第一に、同時期の経済的事情により手掛けたこと。第二に、商業雑誌に創作を掲載することで、作家的地位を高めようと意識したこと。第三に、菊池寛の推薦と川端自身の好みによること。第四に、対象作品の性質自体に川端文学の要素が多く含まれていること。以上の推測を行った。

第一部第二章「川端康成と唐代小説の翻訳」では、川端が訳した唐代小説を検討した。一九二六年に、中国文学をわかりやすい日本語に翻訳した叢書『支那文学大観』が刊行された。川端は第八巻の『唐代小説』を担当し、十四編を訳している。研究対象として「剣侠類」「神怪類」「別傳類」の三大類から、「崑崙奴」、「杜子春傳」、「長恨歌傳」一篇ずつを取り上げた。また、それらを同じ「神怪類」に収録された今東光の「枕中記」、一九二二年に松井等が訳した「杜子春」、『新釈漢文大系』に収められた「長恨傳」と比較し、地の文、会話、韻文の三つの方面から、川端訳の唐代小説の特徴を明らかにした。地の文について、川端の翻訳は概ね原文に忠実である。文意を明白にするために、その一部に加筆や説明がなされたことを確認できるが、訳者の介入する度合は比較的少ない。会話文では、川端は直接話法を採用し、厳密な逐語訳より、娯楽性や文学性に重点を置く。韻文については、二つの翻訳姿勢がみられた。正統な漢詩に対しては、出来る限り原詩の味わいを保存するために、意図的に原語を残したが、流行歌については、原詩の意味を分かりやすく表現するために目的言語である日本語に即した翻訳を用いている。また、川端が唐代小説の翻訳を手掛けた背景について、残された資料から、以下の四点を推測した。第一に、『支那文学大観』の独自性が川端の関心を引いたこと。また、川端は叢書に翻訳を出すことで、作家的地位を高めようと意識したこと。第二に、『文藝時代』の同人の推薦で、かつ塩谷温とは面識があった経緯で、翻訳に携わることが出来た可能性があること。第三に、文言小説の翻訳は比較的簡単で、翻訳の時、塩谷温の力に負うところが多いと考えられること。第四に、唐代小説は、川端の創作にヒントを与えていた可能性が高いこと。以上の推定を行った。

第一部第三章「川端康成と翻案小説「星を盗んだ父」」では、川端の翻案小説を考察した。川端の翻案小説「星を盗んだ父」は、ハンガリーの作家 **Ferenc Molnár**（一八七八～一九五二）による戯曲「リリオム（*Liliom*）」を翻案した短編作品である。近年公開された川端生前未発表の作品であり、執筆時期は一九二四年六月から一九二七年頃の間と推定されている。本章では、まず「星を盗んだ父」の底本について考察した。先行する森鷗外訳、小山内薫訳、ベンジャミン・グレイザーの英訳、鈴木善太郎訳を会話文、地の文の二つの面から、「星を盗んだ父」と具体的に比較した結果、川端は鈴木訳の戯曲「リリオム」を小説に翻案したことが確認された。会話文については、川端は鈴木訳をほとんど改変せずに、そのまま小説に取り入れている。一方、地の文については、鈴木訳の表現を意識的に取捨選択し、自らの言葉でまとめて再構成している方法が窺われる。以上、表現面において、「星を盗んだ父」は鈴木訳に従う箇所が多いと結論づけた。一方、内容的には、川端の独自性が認められ、

「星を盗んだ父」の主題は〈家族愛〉に集中するという特徴を持っている。この〈家族愛〉をモチーフとした作品は川端文学の初期、特に「星を盗んだ父」の執筆時期と推測される一九二四年から一九二七年に最も集中している。本章では、同時期の〈家族愛〉に関する川端作品を辿りながら、具体的に「咲競う花」（一九二四～一九二五）に関連づけて検討した。最後に、川端がこの翻案を行った背景はおそらく菊池寛と金星堂に関係があると推測されることを考察した。

第二部では、「「浅草紅団」の読み直し—プロレタリア文学との接近を中心に」、「「浅草紅団」の読み直し—『世界大都会尖端ジャズ文学』を中心に」という二章に分けて検討した。

第二部第一章「「浅草紅団」の読み直し—プロレタリア文学との接近を中心に」では、「浅草紅団」における事実描写を着目し、この小説が内包するルポルタージュ的な手法の内実を検討した。「浅草紅団」は一九二九年から一九三〇年にかけてまず『東京朝日新聞』に三十七回にわたって掲載された。続きの三十八回から五十一回までは雑誌『新潮』に「浅草赤帯会」を題として発表された。最後の部分は「浅草紅団」として『改造』に収められた。以上の合計六十一回の断章は、一九三〇年十二月五日に単行本にまとめられて先進社によって出版された。また、それに先立つ同年の五月に春陽堂より『モダン TOKIO 円舞曲』に抄録され刊行されている。そして、一九三四年に続編の「浅草祭」が書かれている。本章では、まず、ジャズ音楽やカジノ・フォーリー、『東京朝日新聞』の記事、および添田啞蟬坊の「浅草底流記」を中心に、「浅草紅団」における風俗描写の特徴が写実的であることを確認した。次に、この事実重視の特徴は同時代における考現学の手法とは根本的に異なっていることを提示し、同時代の労働争議の場面をルポルタージュ風に描いたプロレタリア文学運動との比較の視点を導入した。また、一九三〇年代におけるモダニズム文学とプロレタリア文学との接近について考察し、「浅草紅団」の時代背景を検証した。最後に、アメリカにおけるルポルタージュ作品はモダニズム文学の一実験であるという近年の研究上の視点に注目し、川端も同様に、それを「浅草紅団」で試みたと分析した。つまり、川端は「浅草紅団」において、徹底的な事実描写を通して、ルポルタージュの形で新しいモダニズム文学の実験を試行していると推測した。以上、「浅草紅団」は、川端の文学確立期において多彩な実験を試みた集大成的な作品であると結論づけた。

第二部第二章「「浅草紅団」の読み直し—『世界大都会尖端ジャズ文学』を中心に」では、世界都市小説の面から、「浅草紅団」を考察した。春陽堂発行の『モダン東京円舞曲』中の「浅草紅団」は、『東京朝日新聞』に掲載された全体の一部である。このテキストは〈全体の三分の一にも足りぬ〉ということで作者の川端自身によっても批判されており、現在に至るまで研究対象としてあまり注目されていないが、「浅草紅団」を研究する上で、ヒントを与えるテキストだと考えられる。まず、収録された『世界大都会尖端ジャズ文学』における〈ジャズ〉という要素は「浅草紅団」の一つの重要な特徴を表している。また、『世界大都会尖端ジャズ文学』には数多くの都市翻訳小説が収録され、そこに浮上したほかの世界都市像と「浅草紅団」に現われた東京像を比較することによって、世界都市文学の面から「浅草

紅団」を再評価することが可能となる。本章では、まず、叢書『世界大都会尖端ジャズ文学』の特徴を分析した。次に、堀辰雄の「水族館」を中心に、収録された『モダン TOKIO 円舞曲』の性格を検討した。最後に、同シリーズの『組曲・グロテスク巴里』と比較し、「浅草紅団」の位相を明らかにした。具体的には、まず、映画的な性格について、カメラアイ的な表現方法や映画化された点が一致していることが分かった。また、映画性以外にも、二作の間の多くの共通する点を提示した。例えば、下層階級が集まるスラム都市そのものに焦点を当てる点、様々な人々が集合して形成した〈鋳物場〉という舞台設定や過去と現在の対比が強調される点などがある。

以上の通り、本論文では、川端による翻訳・翻案と創作の二つの面から、その初期作品における翻訳文学の位相を検討した。この問題を究明することで、従来〈日本的〉あるいは〈伝統的〉と評価された川端文学について、その根底から文学的性格を問い直す機会を提示することが可能となり、川端康成文学におけるモダニズム的性格の由来や背景を解明することができるだろう。川端初期作品と翻訳文学との関連について、本研究ではごく一部しか分析することができなかったが、今後は他の初期作品も視野に収めて論じていきたいと考えている。